鳥取環境大学紀要
第11号（2013. 3）pp.85-98

〔報　告〕

クチャの千仏洞を訪ねて
－中国最古の石窟寺院－

Inspection of Thousand Buddha Caves in Kucha
－ The Oldest Stone Cave Temples in China －

眞田　廣幸・清水　拓生・檜尾　恵・浅川　滋男
SANADA Hiroyuki, SHIMIZU Takuo, HINOKIO Megumi, ASAKAWA Shigeo

和文要旨：2011年11月、中国新疆ウイグル自治区のクチャ（庫車）県を訪ねた。クチャはタクラマカン砂漠の天山南路に位置するオアシス都市である。古代には亀茲（キジ）国が繁栄し仏教を篤く保護したので、多くの仏教遺跡が残っている。なかでもキジル千仏洞は後漢時代（西暦25～220）から造営された中国最古の石窟寺院である。今回、キジル、クムトラ、キジルガハの千仏洞とスバシ故城を視察した。スバシ故城は『大唐西域記』に記載されている大寺跡であり、玄奘三蔵が天竺行の途中に滞在したことでよく知られている。千仏洞は前室、仏像を安置し礼拝する主室、涅槃仏を祀る後室からなり、壁面や天井には彩色豊かな仏画が描かれる。華北の古代石窟寺院とは異なり、木造建築との複合性をほとんど看取できないが、窟に半円筒形ヴォールトや隅三角持送天井を取り込むなど、中央アジア土着建築の影響が認められる。インドから中国に至る仏教の拡散域では、仏影のあるべき場所として石窟に執着しながらも、地域独自に「窟の建築化」が展開している。
【キーワード】クチャ、千仏洞、石窟寺院、玄奘三蔵法師、木造建築、窟の建築化

Abstract：In November, 2011 we visited Kucha Prefecture, in the Xinjiang-Uygur Autonomous Region. Kucha (Qiuzi) is an oasis city in Tianshan on the southern edge of the Tianshan mountain range, along the southern route through the Takla Makan desert. In ancient times the kingdom of Qiuzi prospered and carefully safeguarded Buddhism; as a result, many Buddhist ruins remain in good condition. In particular, the Kizil (Thousand Buddha) Caves are famous as the oldest stone cave temples constructed since the Later Han Dynasty (25-220 AD). During this study we inspected not only the Kizil, Kumtula, and Kizilgaha caves, but also the Subashe Temple site. Subashe was the largest Buddhist Temple described in the Great Tang Records on the Western Regions, and is well known for the priest Xuangzang having stayed there on the way to India. These Thousand Buddha caves contain a front room (verandah), a central room with a Buddhist image for worship, and a rear area enshrining a Buddha nirvana image; colorful Buddhist murals are painted on the surface of the walls and ceilings. That wooden structures are not found in conjunction with these caves is in direct contrast to the ancient rock cave temples of north China. However, some influence from Central Asian indigenous architecture can be found in the semi-circular barrel vault ceilings and the corner triangle bracket ceiling. Along with the spread of Mahayana Buddhism from India to China, the evolution of caves as a place where one should find an image of the Buddha also spread.
【Keywords】Kucha (also called Qiuzi), Thousand Buddha caves, stone cave temples,
priest Xuangzang, timber buildings, the architectural transformation of the cave

１．玄奘の道

2011年の11月16日から21日まで、中国新疆ウイグル自治区アクス地区のクチャ（庫車）県を訪問した。クチャは、東トルキスタンのタリム盆地北側に位置する人口約40万の都市である。石油や天然ガスが豊富に埋蔵されており、現在は中国西部の開発拠点となっている。古来、タリム盆地にあるシルクロードのオアシス都市であり、古代には亀茲（キジ）国が栄えた。人口の90％近くがウイグル族で、敬虔なイスラム教徒である。自治区の省都ウルムチから飛行機で約１時間の距離にあり、市街地周辺に緑地は極端に少ない。茶褐色の山脈や砂漠が一面にひろがっている。

周知のように、仏教はインドに興り、アフガニスタン方面から中国に伝わる北伝のコース（大乗仏教）と、インドの南側に下がって東南アジアに拡散する南伝のコース（上座部仏教）がある。北伝コースの中途にあたる西域シルクロード沿いの国々の中に亀茲も含まれていた。

図１　クチャ周辺の千仏洞等分布図
（参考文献４　掲載図を一部改変）

都市国家としての亀茲は、前漢時代から『史記』『漢書』の西域伝に登場する。当地での仏教は後漢時代の西暦２世紀後半頃から盛んになり、３世紀後半には中国領土内における仏教信仰の指導的な役割を担っていた。南北朝初期（４世紀）にインドからもたらされた大乗仏教経典を漢訳した鳩摩羅什（クマーラジーヴァ、344-413）の出身地でもある。中国における仏教の最盛期は南北朝時代（439-589）とされ、唐代（618-910）には衰退の兆しをみせるが、西域の亀茲国では唐代にあっても仏教がおおいに栄えていた。７世紀、インドに仏典などを求めて旅した玄奘三蔵法師は、その旅行記『大唐西域記』で以下のように述べている（水谷真政訳注 2011：p. 39）。

> 屈支国（クチャ）は、国の広さが東西千余里、南北六百余里あり、キビ・麦・粳米などを産し、梨や桃・杏などの果物が多い。気候はおだやかで風俗は素直である。管弦伎楽はとくに諸国に名高い。（略）伽藍が百余ヶ所、僧侶は五千余人で、小乗仏教の説一切有部を学習している。

２．クチャの仏教遺跡

クチャの市街地周辺には、キジル千仏洞をはじめクムトラ千仏洞、キジルガハ千仏洞、スバシ故城など仏教隆盛期の遺跡が残っており（図１）、いずれも中国の全国重点文物保護単位に指定されている。千仏洞は山腹に窟を掘り、内部に仏像や塔を安置した「石窟寺院」群で、壁面に仏伝図などの仏教絵画を描いている。千仏洞の多くは市街地から離れた山中に位置する例が多く、斎藤忠（1999：p. 9）は「石窟寺院の特性を考えると、立地環境にあっては、山林寺院として、幽邃な境地にある。僧侶の修行の場として最もふさわしい」と述べている。

図２　キジル千仏洞　遠景

図３　キジル千仏洞　谷西区

図４　前室が失われた石窟（第36窟）

２-１　キジル千仏洞

クチャ市街地から西方に約70km 離れた砂漠のなかにキジル千仏洞がある（図２）。「キジル」とはウイグル語で「赤」を意味する。赤い岩肌に因んで名づけられたという。石窟はミンオイ・ダク山の険しい砂岩質の断崖に造営されている。前面にあたる南側にはチョルタク山が東西に連なり、その麓には天山山脈を源とするムザルト河が流れている。石窟は比高差50～60m の急峻な崖面に分布し、ミンオイ・ダク山を南北に分断するゾクト溝（川）を中心に谷西、谷内、谷東、後山の４地区に339窟造営されている。後漢（３世紀）から唐代（８世紀）までの窟を含む新疆最大の石窟寺院である。339窟のうち256窟が番付されて門扉に数字が貼り付けられている。破壊されたり、盗掘にあった窟が多く、保存状態の良い窟は少数で、壁画をみることのできる石窟は80ヶ所前後にとどまる。また、キジル千仏洞の仏像はすべて塑像のため崩壊しやすく、89基残るのみという。公開されている石窟は谷西区（図３）に限られ、内部写真撮影は禁止されている。今回視察を許されたのは、以下の８窟である（見学順に示す）。

第27窟（７世紀）中心柱窟
第32窟（５世紀）中心柱窟
第38窟（４世紀）中心柱窟
第34窟（３世紀）僧房窟
　５世紀に中心柱窟となった
第47窟（４世紀）大像窟
第８窟（７世紀）中心柱窟
第10窟（５世紀）僧房窟
新１号窟（４世紀・７世紀）中心柱窟
　後室に涅槃像（塑像７世紀）が残る唯一の窟

キジル千仏洞の石窟には、仏菩薩を礼拝供養する「中心柱窟」、大型の仏像を安置する「大像窟」、僧侶が生活する「僧房窟」、書庫や倉庫として使用された「方形窟」がある。中心柱窟は、長方形の平面形で前室、主室、後室からなっているが、砂礫層の山肌の風化が進み、ほとんどの石窟の前室は失われている（図４）。主室と後室のあいだに「中心柱」を掘り残している。中心柱は大断面の方形の柱であり、その正面に仏龕を開き、塑像の仏菩薩坐像を安置している（図５）。中心柱は、宗教空間的な象徴性に加え、半円筒形ヴォールト天井の崩壊を防ぐ構造上の役割をも担っている。主室と後室の天井と壁面には漆喰が塗られ、天宮・伎楽図・説法図・礼拝図・天象図・本生故事・仏像故事などの彩色絵が、土紅・赭・青・緑・朱などの鉱物顔料で描かれている。大像窟は、平面形や構造は中心柱窟と同じだが、中心柱に大型の仏菩薩立像を安置する。僧房窟と方形窟は、キジル石窟の約３分の２を占めている。壁画はなく、天井は低く平坦で、カマドなど生活施設の痕跡を確認できる。以下、視察順に窟の概要を述べる。

第27窟　初唐（７世紀）の中心柱窟。中心に釈迦立像、両脇に釈迦座像を安置していたが、地震や宗教戦争などの影響で仏像はすべて失われ、壁画もはぎ取られている。仏壇の背面の中心柱には小孔が数多く残る。仏像を支える木の棒を差し込んだ痕跡だという。主室入口の上には弥勒菩薩の説法図が黒と白で描かれ、立体感をみせる。門扉両側には金剛力士像の壇（像はない）、後室には涅槃台や火葬図などを残す。前室は前側半分が崩れている

第32窟　５世紀の中心柱窟。木の棒を差し込む小孔が数多く残る。孔に差し込んだ棒の上に粘土を塗って山を造り、須弥山としていた。上に残る壁画は菱形で描かれ、仏教の因縁物語を表す。

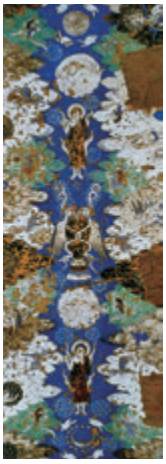
第38窟　４世紀代の中心柱窟で、壁画には笙、シンバル、シチリキ、四絃琵琶、ハープ、竪琴など多種多様な楽器が描かれており、「音楽窟」とも呼ばれている。平面は幅３m、奥行６m（うち主室は４m）、高さ４mを測る。主室の壁面に天宮の伎楽天が描かれており、いわゆる「楽天窟」の代表例でもある。『シルクロード・新疆仏教芸術』（新疆維吾尓自治区対外文化交流協会編2006）によると、第38窟の主室の入口部分の上には交脚して坐す弥勒菩薩を中心とした説法図を描く（図６）。また、天井頂部には帯状に日天・風神・立仏・ガルーダ（神鳥）・風神・立仏・月天を配した天相図（図７）を、その周囲には菱形の区画のなかに仏教の説話の一場面を描く。菱形区画に説話を描くのは、キジル千仏洞の特徴の一つとされる。天井の天神は男性だが、姿がとても美しく、「中国のビーナス」と賞賛されている。天井にはまたトハラ語を確認できる。キジルの他の窟ではみられない文字であり、注目を集めているが、現在研究中で未解読とのこと。

第34窟　３世紀の僧房窟を５世紀になって中心柱窟に改造した。天井に太陽神、月中の兎、蛇（雨の大神）、鳥、立仏、ガルーダ、風神を並べて描く。後室に涅槃台を残す。また、後世の遊牧民族が窟内で生活し、飯炊きなどの火を使った痕跡もみられる。

第47窟　４世紀の大像窟（図８）。キジル千仏洞で最も大きな石窟であり、主室は幅約６ m、奥行約10m、高さ約17mを測る。主室の天井には飛天が描かれ、後室には長さ11mもの涅槃像がかつてはあり、袈裟の部分には金箔が貼られていたが、像ごと盗掘されている。なお、キジルは小乗仏教（上座部仏教）の寺院群として知られるが、第47窟は大乗仏教の寺院である。

第８窟　７世紀に亀茲国の貴族が寄進した中心柱窟の寺院。壁画や仏の袈裟の部分に金箔がわずかに残っている。入口の上には飛天、通路壁には剣をもった16人の賢者が４人ずつ描かれている。また、５絃琵琶を描く唯一

図５　キジル千仏洞第38窟
（参考文献１　掲載図を一部改変）



左：図６　同左　主室前壁と門（参考文献６より）
右：図７　同左　主室天井頂部の天相図（参考文献６より）

図８　キジル千仏洞第47窟

図９　キジル千仏洞第８窟　主室前壁入口上部と窟頂前部
（参考文献４より）

図10　キジル千仏洞新１窟　仏の涅槃像
（参考文献６より）

の窟でもあり、男性の天神が五絃琵琶をもっている(図９)。

第10窟　５世紀の僧房窟。一つの僧房窟に４人の僧が生活していたという。もとは金剛力士像２体を祀っていた（今はない）が、僧房窟に壁画はなく、竈の煙を出す窓が開いている。

新１号窟　以上の諸窟から離れた谷西区の東端、崖面の下部近くに所在する。1973年、砂の除去作業中に発見された。主室天井の左右側壁には菱形の山岳図案が描かれ、後室の天井に大きな飛天が描かれる。後室の奥壁沿いに方形の涅槃寝台を設け、塑像の涅槃像が横たわる。涅槃像を残す唯一の窟。涅槃像は発見時に頭部などがかなり傷んでいたが、1985年に修復されている（図10)。

各石窟の壁画は千数百年の時を経て傷みが進行しているものの、色彩は比較的鮮やかに残っている。とくにラピスラズリを用いた青色は鮮やかにみえる。一方、中心柱窟の後室では、奥壁に涅槃図を描くか、涅槃像の台座を残しているが、すでに何度も述べたように、涅槃像が現存するのは新１号窟のみとなっている。

２-２　クムトラ千仏洞

クムトラ千仏洞は、クチャ市街地から25km ほど西に離れたムザルト河の東崖面、約２km にわたって分布する石窟群である（図11)。そこは、キジル千仏洞の南側に連なるチョルタク山の一角、ムザルト河の下流にあたる。クムトラ千仏洞は５世紀から11世紀まで造営され、以下の３時期に分期されている。

第１期：中心柱窟と方形窟を主とした亀茲王国期
（５～６世紀）
第２期：中原様式がみとめられる安西大都護府期
（７～８世紀）
第３期：中原様式を用いる回鶻（ウイグル）期
（９世紀以降）

なお、日本の大谷探検隊やドイツの探検隊などがクムトラを調査し、壁画・仏像をはぎ取っており、大谷探検隊がクムトラ千仏洞から持ち帰った塑像の菩薩像頭部が東京国立博物館に所蔵されている。石窟群は谷口区とそこから５ km ほどさかのぼった窟群区（大溝区とも称する）に分布している。谷口区には32窟、窟群区には80窟が集中している。今回視察したのは以下に示す窟群区の９窟である（視察順に示し、主要窟の概要を述べる)。

①窟群区谷北区
第68窟（６世紀）中心柱窟
第69窟（６世紀）僧房窟
第70窟（６世紀）中心柱窟
釈迦如来座像が一部残っている。胴脚部の掘出し倚像
第71窟（６世紀）中心柱窟
釈迦如来座像あり。胴体脚部掘出し坐座像
第72窟（６世紀）中心柱窟
釈迦如来立像、頭部が木
第63窟（６世紀）大像窟
第58窟（８世紀）中心柱窟
②窟群区谷内区
第45窟（９世紀）中心柱窟
回鶻の石窟・壁画の仏像が浮彫り
③窟群区谷南区
第16窟（８世紀）中心柱窟
前室を15窟と17窟と共有する三連窟
４躰１組の千仏壁画

図11　クムトラ千仏洞とムザルト河

図12　クムトラ千仏洞　窟群区谷北区

図13　クムトラ千仏洞第67窟～72窟（五連洞）

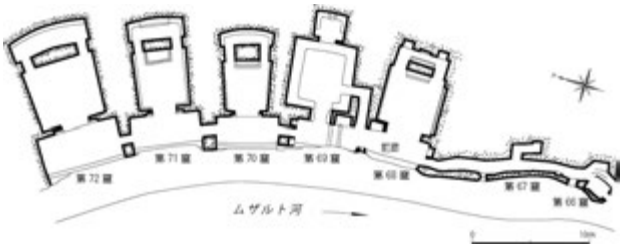


図14　クムトラ千仏洞第67窟～72窟 平面図
（参考文献４　掲載図を一部改変）

図15　走廊（第68窟前より南をみる）

図16　クムトラ千仏洞第69窟 内部

五連洞（第68～72窟）　石窟の類型や形態は、基本的にキジル千仏洞と変わらない。その中で注目されるのが窟群区の北端、谷北地区の石窟群である（図12）。そこには、ムザルト河に面する急傾斜の崖面に20窟ばかりの石窟が開鑿されており、「五連洞」と呼ばれる特殊な石窟群を含む（図13）。五連洞は、第68窟から第72窟が石窟の入口を西に向け連続して開鑿されており、各石窟の前室が一体となって、いわゆる「走廊」の形式をとっている。キジルでも述べたように、山肌の砂礫層は風化が著しく、前室の大半は失われているが、クムトラの第68～72窟の五連洞は前室の連なる「走廊」の構造と空間をほぼ完全に残している（図14・15）。

山の斜面から川岸に下りて山の全景を眺めると、ほぼ垂直に切り立つ崖面に五つの窓が開いているかのようにみえる。五連洞の時期は６世紀代で、石窟群のうち第69窟以外は中心柱窟である。いちばん奥の第72窟が最も大きく、幅約６ｍ、奥行約10ｍもあり、中心柱に釈迦如来の立像が彫りだされている。釈迦如来立像の頭部は失われていたが、現地での説明によると、「木造」の頭部だったという（詳細は不明）。後室には涅槃台を残すが、幅が狭く、寝台は飛び出していただろうとのこと。第72窟の手前にやや小ぶりの第71窟と第70窟が連続する。ともに釈迦如来像が中心柱から彫りだされているが、前者は結跏趺坐、後者は椅像の姿に造形されている。第71窟では「流雲」の壁画を描く。流雲は吉祥の象徴だという。法隆寺の雲斗雲肘木や出雲大社の八雲文様と係わりうるのかどうか。

第69窟は方形窟で、出入口が２個所あり、壁に沿ってベッド状の遺構が造りだされていた。奥に仏龕を設けており、僧房窟であるという説明を受けた。壁の一部にトハラ語を確認できる（図16）。天井には蓮華を描く。この五連洞には僧房窟の第69窟と貯蔵室の第66窟が附属しており、５窟で一つの寺院を形づくっていたと推定されている。クムトラの未公開地区には、同様の連洞形式の窟があるといい、クムトラ千仏洞の特徴の一つと考えられる。

図17　クムトラ千仏洞　窟群区谷南区

図18　クムトラ千仏洞第16窟　飛天と華蓋
（参考文献６より）

第63窟　６世紀の大像窟。もとは立像を安置していた。両側の壁に光背が残っている。釈迦仏の袈裟部分には金箔を貼っていたが、すでにはぎ取られている。天井に残る壁画は菱形配列をしており、釈迦前世の物語を描く。兎、象、猿など前世と係わる動物が何種類かみられる。

第45窟　８世紀の中心柱窟。菩薩の立仏を祀る。果物をもつ子供の像に「南無阿弥陀仏」と漢字で刻みこまれている。薬師如来の周りにも子供の供養者がいて、回鶻期（第３期）の足の長い少数民族を象徴しているという。

三連洞（第15～17窟）　谷北地区の南にある谷南地区は、大溝（水は流れていない）を挟んだ位置に、川面とほぼ同じ高さから石窟が開鑿されている（図17）。現在は堤防を築いて窟を保護しているが、その中に前室を共有する形で３窟を「品」字形に配した窟群がある。時期は盛唐期（８世紀）という。第16窟を主室とし、第15窟と第17窟を脇室として、いわゆる「三合院」式に配置された窟群で、３窟とも中心柱窟である。各石窟の壁画には仏菩薩像や供養者像が大きく描かれているが、中原の様式が導入されている。第15窟と第16窟の壁面に４躯１組の千仏を彫る点は、日本の塼仏にも通じるところがあり、とくに注目される（図18）。

２-３　キジルガハ千仏洞

キジルガハ千仏洞はクチャ市街地から北西約12km のゴビ丘陵にある石窟群で、千仏洞からかすかにクチャの町並みを遠望できる。近くに前漢時代の烽火台跡があり、古くから交通要衝地に近かったことが分かる。キジルガハはウイグル語で「赤い水鳥」を意味する。千仏洞の周辺は草木一本も生えていない砂漠地帯であり、キジルガハの谷には水流がまったくない。しかし、かつてはキジルやクムトラと似て「赤い水鳥」のたむろする水面があったのだろう。実際、雨が降ると谷に水が流れ込み、石窟群の集中する丘陵を侵食するという。

キジルガハ千仏洞は宮殿寺院と呼ばれ、貴族階級の寄進した仏教寺院である。南側が開けた谷を挟む丘陵の東・西・北の崖面に61窟が開鑿されている（図19）。キジルに比べて少し遅い４～８世紀に造営された千仏洞だが、石窟の類型はやはり中心柱窟、大像窟、僧房窟、方形窟

図19　キジルガハ千仏洞　遠景

図20　キジルガハ千仏洞　谷東側の石窟群

図21　キジルガハ千仏洞　谷西側の石窟群

図22　キジルガハ千仏洞第27窟 内部

図23　キジルガハ千仏洞第28窟 内部

に分かれる。クチャ市街地から近いことが災いし、人の訪問が容易であるばかりか、洪水・地震・戦争などの災害の被害をうけて、遺跡の破損が著しく、壁画を残すのはわずか11窟にすぎない。キジルやクムトラと比べて、あきらかに風化・劣化が進行している。今回は以下の９窟を視察した（視察順に示し、主要窟の概要を述べる）。

①谷東側（図20）
　11窟（６世紀）中心柱窟
　14窟（６世紀）中心柱窟
　15窟（時期不明）中心柱窟
　16窟（６世紀）大像窟
　13窟（６世紀）中心柱窟
②谷西側（図21）
　27窟・28窟（７世紀）僧房窟　書庫あり
　30窟（７～８世紀）中心柱窟
　32窟（７世紀）中心柱窟
　38窟（４世紀）中心柱窟

第11窟　６世紀の中心柱窟。前室は崩れてなくなっている。その前室は「走廊」のようになっていて、かつては第11窟と第12窟を繋いでいた。壁画は劣化しているが、下側には釈迦説法図、上には飛天図、天井には天相図を描く。天相図は仏、龍、ガルーダ、仏、風神、馬に乗る仏、太陽神（車輪に乗る仏）を並べる。壁画の菱形配列に特徴があり、ジャータカ（前世の因縁物語）を表現するため、釈迦の前世を象徴する猿、鹿、馬などの動物を描く。「燃えている兎」は水の悪魔だとのこと。

第14窟　６世紀の中心柱窟。貴族が寄進した石窟で、壁画などの表面はすべて金箔を貼っていたが、今ははぎ取られている。入口には、弥勒菩薩の説法図を描く。

第16窟　６世紀の大像窟。外に立つ仏は元々主室に置いており、金剛力士立像を脇侍としていた。天井に菱形配列の壁画があり、釈迦座像を描き、一番高い部分で飛天が踊る。後室に涅槃台を残す。

第13窟　６世紀の中心柱窟。中心柱に仏の立像を安置していたと思われる。壁面には説法図や宮殿図を描く。

第27窟　連続する第27・28窟は７世紀の僧房窟。方形プランで天井が低く、壁に壁画がなく、煤で黒くなっていた。27窟（図22）にはカマド遺構があり、28窟（図23）の奥には経典を収めた書庫を設けており、それぞれ僧房窟と経蔵窟であるという。後世の遊牧民族が寒さを凌ぐ「冬の家」として生活していた火痕と聞いた。

第30窟　７～８世紀の中心柱窟。後室の天井には琴や花、皿、５絃琵琶などをもつ８体の伎楽飛天が、気宇広大で美しく描かれており、その「伎楽飛天図」はクチャ壁画の優品と評価されている（図24）。

第32窟　７世紀の中心柱窟。正方形平面の天井をラテルネンデッケ（隅三角持送り式天井）としている（図25）。ラテルネンデッケは、天井の正方形平面の四隅で斜めに梁木や三角形の材を架して、ひとまわり小さい方形の枠を作り、さらにその上に同様の構造を数段繰り返すことによって、次第に中央部を狭めて高くしていく構法である。アフガニスタンのバーミヤーンで数多く使われており、東は安岳３号墳（４世紀後半）など高句麗の壁画古墳にまで影響が及んでいる。

２-４　スバシ故城

中国語で「故城」といえば都市遺跡を意味するが、チェルターグ山南麓にひろがる「スバシ故城」は都市遺跡ではなく、亀茲国最大の寺院遺跡で、その一部に石窟を含んでいる。『大唐西域記』にみえる「昭怙釐（しょうこり）大寺」がスバシ寺に相当し、３世紀から９世紀まで存続した。『大唐西域記』の記載をここで引用しておこう（水谷真政訳注 2011：p. 44）。

> 荒城の北四十里のところ、山の入りこみに接し一つの河をへだてて二つの伽藍がある。同じく怙釐と名づけ、東［昭怙釐］・西［昭怙釐］と位置に従って称している。仏像の荘厳はほとんど人工とは思えないほどである。僧徒は持戒甚だ清く、まことによく精励している。

スバシの「ス」は水、「バシ」は頭を意味し、スバシは「水の頭（水源）」と訳される。その名の通り、西寺

図24　キジルガハ千仏洞　第30窟　伎楽飛天
（参考文献６より）

図25　キジルガハ千仏洞　第32窟のラテルネンデッケ

図26　スバシ故城　西寺区

図27　スバシ故城（西寺区より東寺区を望む）

区と東寺区の２つの区域を切り裂くように、クチャ河が流れている。もともと西寺区と東寺区は一体の境内を構成していたのだが、1958年の大洪水により中央部が流され、二つの区画に分かれてしまった。西寺区は東西170m ×南北685m に及び、南塔や石窟を中心とした建築遺構が多く点在し、陶器、鉄器、経典などの遺物も出土している（図26）。東寺区は西寺区より少し狭く、東西146m ×南北535m で、仏堂、僧房、北塔、石窟などの遺構が残っている。両区を分かつ河幅はとてつもなく広く、西寺区から東寺区を遠望すると霞んでみえるほどである（図27）。

今回は時間の関係上、招古里大寺の仏塔や仏堂、僧房群、石窟群などが分布している西寺区のみ視察した（図28･29）。建築物の壁には版築を使わず、日干煉瓦と砂礫土を交互に積み重ねている（図30）。おそらく木柱も併用していただろう。仏塔は日干し煉瓦積で残高約11m、塔にのぼる階段跡が南側に延び、全体の姿は象をイメージさせるという説明を受けた。仏堂跡や僧房跡では大きな壁が残っており、もとはポプラの木と葦と泥土で屋根をかけていたという。一部に壁画を残すところもある。石窟はすでに前室と中室が風化し、後室のみ残っている（図31）。非常に規模の小さな石窟で、礼拝堂ではなく、瞑想修行の場にふさわしいと感じられた。

スバシ故城は「伽藍百余所」を誇った「昭怙釐大寺」跡である。遺跡からは多くの貴重の遺物が出土しクチャ仏教研究の重要な資料となっている。しかし、遺跡の風化の度合いは厳しく、ガイドは訪れるたびに傷みが進行していると嘆いていた。また、すでに部分的に触れたとおり、日本の大谷探検隊は明治時代末から大正時代にかけて、クチャのキジル千仏洞、クムトラ千仏洞、スバシ故城などの仏教遺跡を３回調査しており、出土遺物の一部が東京国立博物館などに所蔵されている。クチャの遺跡保全に係わる日中学術交流を進めるべき必要性をつよく感じる視察であった。

３．窟の建築化をめぐって

３-１　石窟寺院と木造建築

昨年の紀要［岡垣・浅川 2012］で報告したとおり、わたしたちは山陰地方に卓越する「懸造＋岩窟」型仏堂の源流を探るため、おもに木造建築と岩窟の関係に焦点

図28　スバシ故城　西寺区仏塔

図29　スバシ故城　西寺区僧房

図30　日干煉瓦と砂礫土を交互に積み上げる構法

図31　スバシ故城　西寺区の石窟

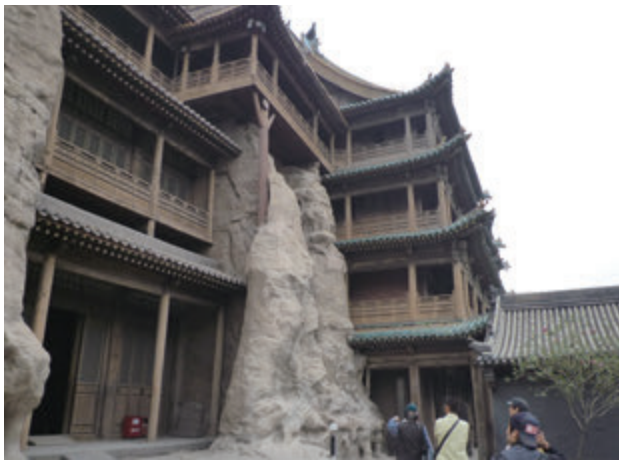


図32　雲岡石窟第５・６窟

図33　敦煌莫高窟　宋代窟檐

を絞り、中国各地の石窟寺院の調査を継続してきた。2009年の山西省雲岡・天龍山石窟を皮切りに（図32)、2010年に甘粛省の麦積山から敦煌莫高窟・楡林窟まで西行し（図33)、2011年には中国の西端にあたる新疆ウイグル自治区のクチャまで達し、キジル、クムトラ、キジルガハの千仏洞をこの目でとらえた。いわば、大乗仏教伝来のルートを遡行する道筋を辿り、石窟寺院のルーツに迫る旅をしたことになるだろう。その道程に石窟と木造建築の複合性の変化が如実にあらわれている。この変化を述べる前に、前報［岡垣・浅川 2012：p.151］で整理した岩窟仏堂の分類を以下に再録しておこう。

Ａ型：岩窟単独内陣型
Ｂ型：岩窟・懸造複合型
　Ｂ－１型：懸造礼堂型
　　Ｂ－１ａ型：懸造＝窟檐型
　　Ｂ－１ｂ型：懸造＝向拝礼堂型
　Ｂ－２型：懸造内陣型
　　Ｂ－２ａ型：懸造＝入母屋造礼堂型
　　Ｂ－２ｂ型：岩窟内本堂型
　　Ｂ－２ｃ型：岩陰内本堂（本殿）型
　Ｃ型：絶壁懸造型

この諸類型は日本の「懸造＋岩窟」型仏堂を細かく分類したものだが、中国の石窟寺院にも応用できる。黄土高原東寄りの雲岡石窟（北魏）では石窟の前に木造の楼閣を設け、前者を内陣、後者を礼堂としている。いわゆる内陣・礼堂造の空間構成をしており、上の分類ではＢ－２ａ型に近い。いま雲岡でみる楼閣は清代の再建だが、北魏の地理学者、酈道元の『水経注』には雲岡寺院に木造の堂宇が林立するとの記載があり、木造建築と石窟との複合性は北魏にまで遡ることが分かる。一方、甘粛の石窟では木造の「礼堂」を確認できていない。石窟を塞ぐ「窟檐」に特徴があり、上の類型ではＢ－１ａ型と言える。敦煌莫高窟は、いまも唐宋代の窟檐を残している。ところが、新疆クチャの千仏洞では、礼堂的な前室を備えるものの、木造建築と呼べる部分は存在せず、木材が用いられたとすれば、扉や窓などの建具や、みえない部分で天井や塑像を固めるための補強材に限られたであろう。日本を加えて岩窟／石窟と木造建築との関係を概観するならば、東に行くほど木造建築の比重が大きくなることが分かる。それを西の熱帯乾燥地域から東の温帯湿潤地域に至る気候環境への適応の差であると解釈すれば、至極当然のことでもあるが、仏教という普遍的宗教が拡散するにあたって、舞台となる仏堂のスタイルを完全に保持しようという意識は必ずしも高くなかったことを示している。

３-２　「窟の建築化」という視点

クチャ訪問の３ヶ月後、南インドを訪問し、アジャンタ、エローラ、アウランガバード、エレファンタ島の石窟寺院を視察した。南インドを代表するこの４寺に限るならば、クチャの千仏洞と同じく、木造と呼べる部分はなく、木材が用いられたとすれば建具や補強材だけだったであろう（岡村秀典氏の御教示によれば、ムンバイ近郊のバハジャ石窟に前１世紀の木造アーチが残っているというが、後補材の可能性が高いと浅川は考えている)。しかしながら、クチャとインドでは窟そのものに大きな違いがある。クチャの場合、砂礫層の山肌にただ横穴を掘りこんだだけで、建築的な演出がほとんど認められない。南アジアの場合、インドではアジャンタ第Ⅰ期（前１世紀～後１世紀、図34）に代表されるように、すでに紀元前の段階から「窟（いわや）の建築化」が鮮明で、アジャンタ第Ⅱ期（５世紀後半～６世紀）になると、柱・柱頭組物・

図34　アジャンタ石窟第10窟（前１世紀～後１世紀）
※写真は山村賢治による

図35　アジャンタ石窟第１窟（５世紀後半～６世紀）

図36　スリランカのダンブッラ石窟第１窟
（後1世紀、白い建物は近代の増設）

図37　雲岡石窟第６窟の楼閣式礼堂（木部は清代）

梁･天井などに見事な浮彫が施されており､｢窟の建築化｣はいっそう華やかになる（図35）。平地に建つ石造寺院の構造と意匠を石窟にもちこもうという発想が強くなるのである。ただし、スリランカのダンブッラ石窟第１窟（後１世紀）をみると、横穴を掘って壁画を描くのみで、建築化していない（図36）。

「窟の建築化」はアジャンタⅡ期とほぼ併行して中国でも北朝期に胎動する。その始まりは北魏大同の雲岡石窟であったと言われる。雲岡については、すでに述べたように、窟の外側を木造の楼閣式礼堂で覆う（図37）に加えて、窟内壁面に平三斗と人字形斗栱を表現している（図38）。法隆寺様式に最も近い天龍山石窟（北斉）の平三斗と人字形斗栱は窟の正面に表現されており、その前には礼堂的な木造の施設があったと考えられる。要するに、窟の外側を木造建築で覆い、窟の内側に木造建築の細部を表現することで、石窟を木造の寺院に近づけようという造形意図を読み取れるだろう。

じつは、クチャの千仏洞においても、窟が建築化していないわけではない。それは天井形式にあらわれている。ほぼすべての中心柱窟は半円筒形ヴォールト天井になっており、まれにラテルネンデッケ（隅三角持送天井）を採用している。新疆トルファン（吐魯番）のウイグル族住居は半地下室をもつ土造アーチ構造で知られており（図39左）、半円筒形ヴォールト天井は土造アーチの洗練された姿とみることができる。一方、ラテルネンデッケは木造建築に起源する屋根構法であり、パミールの山間地帯で現在も民家に使われているという（図39右）。半円筒形ヴォールト天井やラテルネンデッケは、おそらくスバシのような大寺の仏堂を構築する際に導入され、のちに千仏洞などの石窟に応用されるようになったのだろう。

インドから中国・日本に至る北伝仏教の拡散域では、仏影のあるべき場所として石窟に執着しながらも、地域独自に「窟の建築化」が展開したと考えられる（図40）。

図38　雲岡石窟第９・10窟内壁の平三斗と人字形中備（北魏）

図40　不動院岩屋堂（木部は室町時代初期、鳥取県若桜町）

【附記】　本稿は科学研究費基盤研究C「石窟寺院への憧憬－岩窟／絶壁型仏堂の類型と源流に関する比較研究－」（研究代表者・浅川滋男）の一環として2011年11月16日～21日におこなった中国新疆ウイグル自治区クチャ市千仏洞等仏教遺産の視察の成果である。調査の成果については、鳥取県環境学術研究費助成研究「摩尼寺奥の院遺跡の環境考古学的研究」(研究代表者･浅川滋男）による鳥取環境大学主催のシンポジウム「山林寺院の原像を求めて－栃本廃寺と摩尼寺奥の院遺跡」（2011年12月17日、於仁風閣）で眞田が報告した。また、「３．窟の建築化をめぐって」については、2012年度鳥取環境大学公開講座における浅川の講演「聖なる巌（いわお）－霊山の奥宮・奥ノ院と巨岩信仰－」に基づいている。本稿はこの二つの講演記録に加筆修正を施し、成稿したものである。その後、2012年９月30日に開催したアジア石窟寺院研究会における岡村秀典教授（京都大学人文科学研究所）の講演「山中の仏教寺院－西インドの石窟寺院を中心に－」には触発されるところが多かった。記して、感謝の気持ちを表したい。

図39　トルファン民家の土造アーチ構造（左）とパミール高原民家の木造ラテルネンデッケ（右）
※右写真は澤田真理子による

参考文献

1．浅川滋男編（2011）『大山・隠岐・三徳山－山岳信仰と文化的景観－』鳥取環境大学建築・環境デザイン学科＆鳥取県教育委員会文化財課歴史遺産室
2．浅川滋男編（2012）『摩尼寺「奥の院」遺跡－発掘調査と復元研究－』平成22年～24年度科学研究費補助金基盤研究Ｃ・平成23年度鳥取県環境学術研究費成果報告書、鳥取環境大学
3．岡垣頼和・浅川滋男（2012）「岩窟・岩陰型仏堂と木造建築の関係についての調査ノート」『鳥取環境大学紀要』第9号・第10号合併号：p. 135-158
4．新疆ウイグル自治区文物管理委員会／拝城県キジル千仏洞文物保管所編（1985）『中国石窟キジル石窟』第1巻、平凡社
5．新疆ウイグル自治区文物管理委員会／拝城県キジル千仏洞文物保管所編（1984）『中国石窟キジル石窟』第２巻、平凡社
6．新疆ウイグル自治区文物管理委員会／拝城県キジル千仏洞文物保管所編（1985）『中国石窟キジル石窟』第３巻、平凡社
7．新疆ウイグル自治区文物管理委員会／庫車県文物保管所編（1983）『中国石窟クムトラ石窟』平凡社
8．斎藤　忠（1999）『石窟寺院の研究―インド・中国・韓国・日本の系譜を求めて』第一書房
9．新疆維吾尓自治区対外文化交流協会編（2006）『シルクロード・新疆仏教芸術』新疆大学出版社
10．水谷真成訳注（2011）『大唐西域記１』初版第７刷東洋文庫653、平凡社

参照サイト

１．http://avantdoublier.blogspot.jp/2008/11/blog-post_28.html
２．http://asalab.blog11.fc2.com/blog-entry-2781.html
３．http://asalab.blog11.fc2.com/blog-entry-2784.html
４．http://asalab.blog11.fc2.com/blog-entry-2786.html
５．http://asalab.blog11.fc2.com/blog-entry-2787.html
６．http://www.saiyu.co.jp/newspaper/tc_report/mideast_asia/060630HE0031/index.html

（受付日2012年８月24日　受理日2012年11月２日）